

## 1 日本の伝統演劇 [三大国劇]

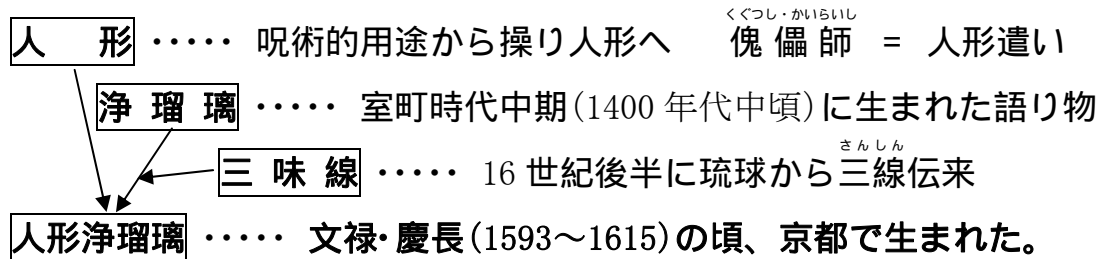
能 楽 …… 室町時代前期(1400 年頃)に観阿弥、世阿弥父子によって大成した。  
(能と狂言) 世阿弥は能楽の理論書『風姿花伝』を書いた。

歌舞伎 …… 出雲の阿国の歌舞伎踊りから始まり、江戸時代前期(1600 年代後半)に大成した。

人形浄瑠璃

## 2 人形浄瑠璃とはどんな芸能か。

1 人形浄瑠璃は、人形操り・浄瑠璃・三味線からなる人形劇で、江戸時代以降、歌舞伎と人気を二分した伝統演劇



2 元禄時代(1600 年代末~1700 年代初頭)にすぐれた太夫や浄瑠璃作者が出て、人形浄瑠璃は大きく発展した

竹本義太夫(1651~1714) 義太夫節を創始した太夫。以後、浄瑠璃といえば義太夫節をさすようになった。大阪の道頓堀に竹本座を開き、近松の作品を上演した。

近松門左衛門(1653~1724) 浄瑠璃作者。人間の心情を写實的に描写し、「世話物」のジャンルを開いた。「東洋のシェークスピア」と呼ばれる。尼崎市の広濟寺や大阪市の谷町に墓がある。

世話物(町人社会を描いた現代劇):「曾根崎心中」「冥途の飛脚」「心中天の網島」

時代物(武家社会を描いた時代劇):「国性爺合戦」

曾根崎心中 道行

この世のなごり、夜もなごり、死にに行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ、あれ数ふれば暁の、七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の、鐘の響の聞き納め、寂滅為楽と響くなり、鐘ばかりかは、草木も、空もなごりと見上ぐれば、雲心なき水の音、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、梅田の橋をかさぐさ、鶴の橋と契りて、いつまでも、われとそなたは夫婦星、必ずさふとすがり寄り、二人がなかに降る涙、河の水嵩も勝るべし…

儒学者 荻生徂徠が「近松が妙処、此中にあり」と絶賛した名文中の名文。

### 3 全盛から衰退、そして復興へ

1700年代前半、大阪の道頓堀では竹本座と豊竹座の2座が互いに人気を競った。この頃、人形の三人遣いが完成した。

竹本座(竹本義太夫) 1684～1768  
地味で重厚な芸風、西風  
豊竹座(豊竹若太夫) 1703～1765  
派手で技巧的な芸風、東風

1700年代中頃、人形浄瑠璃は歌舞伎を圧倒して全盛期を迎えた。この頃、三大名作が生まれた。

「菅原伝授手習鑑」<sup>すがわらでんじゆてならいかみ</sup>「義経千本桜」<sup>よしつねせんほんざくら</sup>「仮名手本忠臣蔵」<sup>かなてほんちゆうしんぐら</sup>

その後、歌舞伎の人気に押され、かつての勢いをなくす。

1800年代初頭、津名郡仮屋出身の植村文楽軒<sup>うえむらぶんらくけん</sup>(正井与兵衛)が大阪で人形浄瑠璃一座を旗揚げした。明治5年(1872)に3代目文楽軒が「文楽座」と命名。淡路市仮屋の勝福寺に供養塔がある。

操り段々流行  
して歌舞伎は  
なきが如し  
操りの繁昌言  
はんかたなし  
浄瑠璃譜

## 4 淡路人形浄瑠璃(国指定重要無形民俗文化財)

### 1 淡路人形浄瑠璃研究の動向

(1) 新資料の発見 引田家資料・・・上村源之丞座座本引田家伝来の資料

上村源之丞座：淡路人形の元祖。大正初期に徳島に移り、大空襲(昭20.7.4)で壊滅した。

鈴江家資料・・・岩手県盛岡市の鈴江四郎兵衛座の資料

「芝居根元記」・・・元禄6年(1693)の上村源之丞座の徳島興行の詳細な記録

(2) 研究の成果 『伝統芸能淡路人形浄瑠璃』(平14年、三原町教委) 417頁

『引田家資料』(平23年、淡路人形協会) 355頁

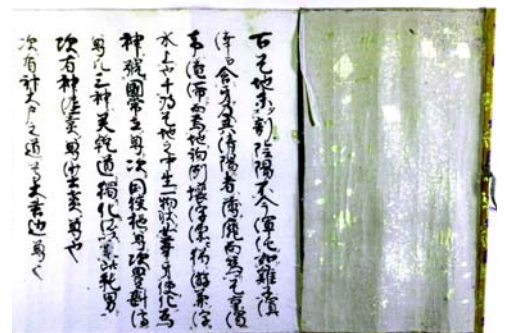
### 2 淡路人形起源伝承

「道薫坊伝記」<sup>どうくんぼうでんき</sup> 寛永15年(1638)付の巻物

淡路人形の由来を書いている。

藤原百太夫<sup>ひゃくだゆう</sup>正清が漁をしていると、和田岬の沖で蛭子(ひるこ、えびす)が漂っていた。蛭子は宮殿を建てるように命じ、西宮大明神が建てられた。道薫坊が蛭子に仕えていたが、道薫坊が亡くなると暴風雨が続

いた。このことを都に報告すると、道薫坊をまねた人形を作って神慮を慰めるよう勅命が下った。百太夫が道薫坊の人形を操ると平穏になった。百太夫は人形を操って諸国を巡り、淡路の三條に住みついて村人に人形操りを教えた。



りんじ  
「**綸旨**」

元龜元年(1570)に引田淡路掾が宮中で三社神樂  
(式三番叟)を奉納し、從四位下の位を授かった。

※綸旨:天皇の私的な意思や命令を伝える文書。

引田淡路掾:百太夫の子で上村源之丞座初代座本  
と伝えられる。

一 磯駟廬島三條道薫坊  
相繼引田淡路掾 今般於  
禁裏節会三社神樂  
之式奉捧 依之從四位  
下被叙者也  
天氣之処如件  
中院大納言執達  
(花押)  
元龜元年二月

**三條の地図**



3 1700年代前半、淡路には40以上の人形座があった

(1) 『淡路草』(文政8年・1825)から

「**道薫坊術** 享保元文(1716~40)ノ頃迄八四十株にアマレリ。今十組残レリ。  
十八坐本と称す。」

(2) 座数の移り変わり

享保元文(1716~40)	淡路で40座以上	(『淡路草』より)
元文6年(1741)	三原郡で38座	
宝暦3年(1753)	三原郡で24座	
宝暦5年(1755)	三條村で21座	
文化8年(1811)	淡路で21座	
天保13年(1842)	淡路で18座	
嘉永7年(1854)	淡路で16座	
慶応元年(1865)	淡路で17座	(以上、引田家文書より)
明治40年(1907)頃	淡路で10座15組	(不動佐一『淡路人形の由来』より)
大正15年(1926)	淡路で7座	(新見貫次『淡路の人形芝居』より)
昭和10年(1935)	淡路で6座	(不動佐一『淡路人形の由来』より)
昭和24年(1949)	淡路で4座	(不動佐一『淡路人形の由来』より)
現在	淡路で1座	

### (3) 主な人形座

- 上村源之丞座(三條村) 淡路人形の元祖、資料は淡路人形浄瑠璃資料館へ
- 吉田伝次郎座(三條村) 淡路人形座へ
- 市村六之丞座(市村) 淡路人形浄瑠璃資料館へ
- 小林六太夫座(鮎原西村) 紀州藩主のひいき、徳島県郷土文化会館へ
- 淡路源之丞座(中田村) 明治以降の座、ソ連公演、兵庫県立歴史博物館へ

## 4 座本の組織

座本は、上村源之丞(日向掾)座のもとで同業者組合「淡州座本中」を作り、会合(12/19)を開いてさまざまな規約(「仲間諸法度」)を取り決めた。

### 寛延4年(1751)「仲間諸法度書之事」

祭文・手妻・恵美須・大黒等の禁止、博打の禁止ほか

### 宝暦5年(1755)「仲間諸法度之事」

仲間諸法度の遵守

### 宝暦13年(1763)「定」

門三番叟・押しかけ三番叟等の禁止

### 文化8年(1811)「座本中究方之事」

一人稼ぎの禁止など

### 慶応元年(1865)「会合条目定」

阿波淡路での出遣い出語り禁止など

### 明治26年(1893)「規約証」

他座の交渉中に売り込み禁止など

座本中究方之事

一 先年より吉人稼之義指留有之候へ共、  
 近比猥り二相成居申二付、猶又此度御  
 究被成、私共へ被仰付候は、当御國中  
 吉人稼之義堅指留申二付、村中重々相  
 究、此上二も相背申者於有之二は、見  
 付次第道具取上、村中相封シ可申事。  
 (略)

一 他国にて不埒いたし候者、座本役者共  
 聞付次第座本連中はぶき、役者は連取  
 を指留可申事。(略)

三條村 源之丞 印

文化八年正月日  
 (以下、座本20名署名印)

法度違反者には、諸道具を没収し、除名処分(講外)という厳しい処分が決められていたが、ほとんどの場合、仲介人を立て、詫び証文と過銀や酒を納めることによって許してもらった。

## 5 人形遣い

(1) 身分 道薫坊廻どうくんぼうまわし：淡路の人形遣いにだけ与えられた身居みずわり(身分)

(2) 人数 寛延4年(1751)「仲間諸法度書之事」の署名から

三條村	129人	
市村	25人	(家族の人形遣いも入れると合計59人)
地頭方のうち傍示川	19人	
三原郡合計	173人	人形遣いの実数は400人余りか?

6 淡路人形浄瑠璃と徳島藩

元和元年(1615)、淡路は徳島藩領となる。

(1) 徳島藩は淡路の人形座(上村源之丞座)を保護した

棒役(夫役 = 税金)の免除。

「日向」の名を賜る。脇差の着用

御前操り、御手当芝居、御祝儀芝居

資金の貸し出し

- ・元禄5年(1692) 銀札3貫目
- ・延享3年(1745) 銀札1貫目  
(無利子で100目づつ10年年賦)
- ・天保8年(1837) 銀札7貫目

○金1両=銀60匁(目)=銭4000文

○1両は、今のお金でいくらぐらいか

\*米価を基準に計算すると

江戸時代初期の1両 = 10万円

中~後期の1両 = 3~5万円

幕末の1両 = 3~4千円

\*江戸時代中期の1両を

米価で換算すると 4万円

職人の賃金で換算すると 30~40万円

そばの代金で換算すると 12~13万円

乍恐奉願上御訴訟之事(要旨) 宝永二年(一七〇五)

祖父源之丞(三代目源之丞、承応一年没力)のとき、初代藩主至鎮様の御前で操りを仰せ付けられ、御意にかなない、棒役三本御赦免いただきました。一代藩主忠英様の淡路巡見の際、親源之丞(四代目源之丞、天和二年没)が操りを仰せ付けられ、御意にかなない、日向の名を賜りました。三代藩主光隆様のとき、綱通様ご誕生、ご着袴の際、御祝儀芝居を拝領しました。御前操りも度々仰せ付けいただきました。貞享三年(一六八六)に年貢滞納が十六石余、高い借銀二貫四百目となつて名代(興行権の所有者)が取り続き難くなり、芝居拝領を願い出ましたところ、徳島城下での芝居を頂戴し、存続することができました。しかし、その後も年々の負債が重なつて、元禄五年(一六九二)には名代が絶えるほかない状況に追い込まれ、借銀をお願いしたところ、銀札三貫目の拝借をお許しいただき、翌年徳島城下で十四日間、元禄九年には洲本で十日間の芝居を拝領し、お陰様で今まで役者を手放さずにすみました。しかし、近年は不景気、物価高で地方興行の利益が上がり、とりわけ資金繰りに行き詰まっています。借銀の返済も滞り、一貫八百目が未返済になっています。芝居に使う諸道具を揃えることもできず、困り果てています。前々は庄屋鈴江又五郎様にお頼みして商人から借用して道具を揃えましたが、四・五年前から利息の返済も滞つて新たに借銀することもできず、もはや一座存続しがたく困窮しています。これまで度々ご援助をいただきましたが、この度は、新たなお願いは恐れ多く差し控えていましたが、この度はおめでたい時節で、このようなときには前々から操り芝居を仰せ付けたいので、恐れながら、徳島御城下にて日数十四日、洲本にて十日の芝居を仰せ付けくださいますれば、一座が存続でき、ありがたく存じます。

(2) 御手当芝居 経営難になったとき、藩が大規模な興行をバックアップした。

興行日数は、徳島城下で晴天14~15日、洲本10日が通例。

元禄6年(1693)の御手当芝居 …… 『芝居根元記』より

- ・経営難に陥った上村源之丞座は、元禄5年に藩から銀札3貫目を借用し、翌6年に徳島城下での芝居を願い出た。19名の常雇いの人形遣い・太夫・三味線に新たに大阪から雇い入れた大夫2人・三味線弾き1人を加え、徳島東富田で14日間(4/13~5/8)の大規模な興行を行った。
- ・浄瑠璃は当時の新作物7題。幕間に間狂言(踊り、寸劇など)が演じられた。
- ・収益は銀16貫目(約2,500万円?)。花(御祝儀)は除く。

### (3) 御祝儀芝居

若様の誕生・着袴・疱瘡快癒、藩主のお国入り・昇進など、藩に慶事があったとき、上村源之丞座や市村六之丞座に大規模な興行をやらせた。

#### 文化13年(1816)の御入国祝儀芝居

第12代藩主蜂須賀齊昌のお国入りに際し、源之丞は徳島で晴天30日、洲本で15日の御祝儀芝居拝領を願い出たが、認められたのは、慣例によって徳島15日、洲本10日。

##### <徳島興行>

- ・名東郡佐古村の畑地3反を借りて小屋掛け。興行日数は晴天15日のところ7日追加。文化13年3月11日～4月下旬、毎日五ツ時(午前8時頃)開演。
- ・出演者 太夫10人(うち<sup>おいだき</sup>追抱<特別出演>2人)、三味線4人、人形遣い24人 計38人
- ・スタッフ 札売場3人、中札場2人、御役人木戸2人、男木戸2人、女木戸2人、中木戸2人、御役人廻り2人、見廻り人2人、料理茶屋1人、酒店1人、茶屋1人、菓子店1人、麺類店1人、棧敷中座世話人8人 計30人

##### <洲本興行>

- ・洲本塩屋川原で小屋掛け。役所より小屋掛けに使う杉丸太25本、大竹30束貸し出し。
- ・8月23日～9月6日(開演前夜、台風で芝居小屋が壊れて開演を1日順延)
- ・興行日数は晴天10日のところ5日追加。「菅原伝授手習鑑」五段目で花火の演出。

## 7 淡路の人形座の地方興行 …… 全国に浄瑠璃文化を伝えた

淡路の人形座はもともと職業的芸能集団。村芝居のような素人の芸能ではない。

人気のある有名な太夫を特別出演(「<sup>おいだき</sup>追抱」という)として大阪などから雇った。

<sup>かみがた</sup>上方の最新外題をいち早く取り入れ、年間を通して(1月上旬～12月中旬)各地を巡業した。野掛け小屋という仮設舞台を組んで上演した。

阿波 「元木家記録」(石井町元木宇三郎)の記録(文化8年・1811～安政4年・1857)

吉川安五郎座22回 上村源之丞座21回 市村六之丞座19回ほか

「酒井家文書」(半田町堺屋武助・弥蔵)の記録(天明4年・1784～明治22年・1888)

中村久太夫13回 上村源之丞8回 市村六之丞5回 蛭子家忠太夫3回ほか

九州 府内藩(大分県大分市)浜の市での興行 …… 「府内藩記録」より

宝永元年(1704)「淡路之小操…操人数十八人、大夫淡路六太夫、大坂佐内…」

宝永2年(1705)「中操芝居淡路座本市村六之丞、太夫難波左太夫…人数21人」

○筑前芦屋(福岡県遠賀郡芦屋町)

安永7年(1777)「祇園社、<sup>ひゅうがのじょう</sup>上村日向掾能き操也。…人形<sup>いず</sup>方何れも上手也」

天明2年(1782)「吉田伝二郎初めて下る。…能き座也」

○延岡藩(宮崎県延岡市)

文政6年(1823)「淡路島人形座中村幸太郎、木戸銭三十五文、場銭六文、八人」



③紀州 ○小林六太夫座の天保3年(1832)の御前操り

6月、紀州藩古川御埜邸で2日間上演。六太夫は紀州での佩刀を許された。

○小林六太夫座の天保4年(1833)の御前操り(西浜御殿)

4月26日・4月28日・6月6日、お庭の拝見、「人形衣裳并小道具長持六棹」拝領

④北陸 ○越前福井での興行…「橘宗賢伝来年中目録」より

明和6年(1769)～天明5年(1785)、吉田伝次郎座、市村六之丞座ほかが興行。

○加賀大聖寺藩の山中医王寺(石川県加賀市山中温泉)での興行…『三州奇談』

宝暦10年(1760)より、政右衛門座が山中、山代を巡演。

⑤中部 土岐～瑞浪～恵那～中津川～伊那谷というルートに沿って淡路の人形座の興行記録や淡路系人形芝居伝承地が点在する。

享保9年(1724) 市村六三郎、伊豆木(長野県飯田市三穂)の旗本小笠原家に招かれる。

寛保3年(1743)～天明3年(1783) 市村六三郎座、市村金太夫座が巡演。

## 8 淡路人形の広がり … 淡路座の巡業が各地に人形浄瑠璃を根付かせた

### (1) 三人遣い人形芝居の分布

は主な淡路系人形芝居

は非淡路系、または系統不明の人形芝居

番号がついているのは現在活動中

番号がついていないのは廃絶したもの



三原町(南あわじ市)教育委員会  
『伝統芸能 淡路人形浄瑠璃』より

### (2) 盛岡で発見された淡路人形

○昭和62年7月、岩手県盛岡市の鈴江博・アイ氏宅から、17世紀にさかのぼるとされる極めて古い様式の人形と古文書類が発見され、鈴江家は淡路の三條村から移った人形座本で、後に印判師を兼ねた家柄であることがわかった。



360年ぶりに淡路の舞台上で舞う鈴江家の三番叟

○文書によると、先祖**鈴江四郎兵衛**は三條村の庄屋**鈴江又五郎**の弟で、寛永18年(1641)に盛岡に来住し、城中本丸で諸芸を源重直公の上覧に供したところ、以後毎年正月、城中で「道薫坊廻シ」を勤めるようになり、人形座本として活動した。

覚

下拙先祖、生国淡州三原郡三條村鈴江又五郎同弟同名四郎兵衛、盛岡御役人中様以 御憐愍を、寛永十八年住居被仰付、正月四日於御本丸二山城守源重直公江諸芸奉入御上覧。為御吉例正月四日御城内江罷上り道薫坊廻シ奉御壽。依之盛岡鎮守之御祭礼并御領内在々迄以御慈悲を先年より御町奉行様江奉願上候所、年々御切手被下置渡世仕候。  
延享五年(1748)五月十五日

(3) 長野県伊那谷(天竜川流域)の淡路系人形芝居

座本市村六三郎 享保9年(1724)~天明3年(1783)の興行記録あり。伊那谷で死亡。

古田人形(上伊那郡箕輪町)と市村久蔵

- ・古田人形は、享保14年(1729)頃にはじまる。
- ・安永3年(1774)「当年ヨリ師久蔵」
- ・文化7年(1810)正月6日 死亡
- ・文政7年(1824) 淡路人形遣い**吉田時蔵**が来住。

祭礼操之由来記

安永之頃(一七七二~八〇)より淡州之者市村久蔵申座崩レ当村二住居仕罷在候而、天下泰平之三番相年々早春ニ為祝義仕候。右久蔵義文化六巳年病死いたし候故、夫より年々ハ不仕候。  
(文政七年・1824)

「御繪旨」一軸「道薫坊伝記」

覚道薫坊之事

御繪旨之儀は先年淡路国へ頂戴仕、其写三拾六本は国中へ弘候て、永久神いさめの操致候様蒙勅免相勤候、証拠之一軸大切二守護仕所、相違無御座候て、五拾ヶ年以前伯父市村六三郎諸国へ罷出候時節、国本より持参仕、国々は勿論エソ迄も相渡り操興行仕、又々当国へ渡り飯田辺に於るて老死仕、其節拙者に被讓候故、是迄大切に相守所持仕、然所拙者事も三拾ヶ年前に御地江罷越、数年御両公之御世話ニ罷成候所、此度病氣付候迎も不相叶と存付候へ共、世倅事八町人二いたし候得ハ所詮相統難致存候間、右之一軸御譲り申度奉存候、何卒幾久敷道薫坊之一曲御勤被下度候、此段幾重ニも御頼置申度奉存候、以上  
淡州三原郡 市村久蔵 印  
文化六年己巳十一月



久蔵夫婦の墓

黒田人形(飯田市黒田)と吉田重三郎

- ・天明年間(1781~88)、淡路の人形遣い**吉田重三郎**が来住。文政4年(1821)死亡。
- ・天保11年(1840)、間口8間×奥行4間の二階建て舞台完成。最古最大の人形舞台



重三郎の墓



黒田の人形舞台

「明神講誓約規則書」  
当村正命庵に住居したる正覚真海と云う禅僧は人形教育の祖人なり。また天明年中淡路の国より**吉田重三郎**と云う人形の芸人来り、村内へ専ら教え、此者当村住居し、文政年中に没す。(略)太念寺に廟所あり。吉田重三郎と云う者、人形根本の免伝を所持致す。没して後は右の伝書、当村に納る。全人形座の秘書にて容易に得難き書なり。  
明治十六年(1883)

「人形根本の免伝」「全人形座の秘書」=「道薫坊伝記」

河野人形(下伊那郡豊丘村)と森川千賀蔵

- ・千賀蔵来住の経緯は不明。「道薫坊伝記」を残す。
- ・古田人形に森川千賀蔵の金看板がある。



#### (4) 文楽の始祖植村文楽軒も淡路出身

植村文楽軒(正井与兵衛、1751～1810、淡路国津名郡仮屋浦出身)が19世紀初頭に大坂高津で人形芝居小屋を旗揚げ。明治5年(1872)に3代目文楽軒が「文楽座」を称した。



文楽軒の妻てる



文楽軒の供養塔  
淡路市 勝福寺

### 9 淡路人形浄瑠璃の特徴

#### (1) 淡路独特の外題を長く伝承してきた

中央で途絶え、淡路座でのみ伝えられたもの

基本的に原作のままで伝承するもの

「おうしゅうひでひらうはつのはなむこ奥州秀衡有鬢塚」(元文4年・1739) 「げんべいやしまかっせん源平八島合戦」(明和8年・1771)

「かたきうちてんがぢやや敵打天下茶屋」(寛政8年・1796) 「たまものまえあさひのたもと玉藻前曦袂」(文化3・1806 改作初演)など

淡路座において原作に大幅な増補・改変がなされたもの

「しずがだけしちほんやり賤ヶ嶽七本槍」(「ひらがだけゆきみのじんだて比良嶽雪見陣立」と「たいこうごにちはたあげ太功後編の旗颯」の取り合わせ)

「しょうつしあさがおばなし生写朝顔話」(未完の「増補生写朝顔話」を完成させる)など

淡路座で創作、初演されたもの

江戸時代の作品

「いまよげんじあずまぐんだん今代源氏東軍談」(淡路座の初演) 「かたきうちひごのこまげた敵打肥後駒下駄」(淡路座の新作浄瑠璃)

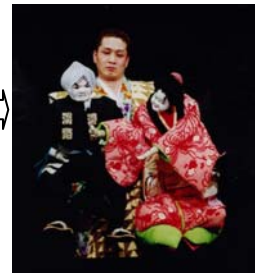
「ふたなしまおんなてんじんき二名島女天神記」(幕末期の淡路座の初演作品)など

明治期以降の淡路座初演の時局物

「鹿児島戦争記」「日清戦争記」「倭仮名北清軍記」「日露戦争記」など

#### (2) ケレン味(観客を驚かせる趣向)に富む演出や工夫 高いエンターテインメント性

早替わり：人形や衣裳を瞬時に取り替える演出(「狐七化け」など)



道具返し：舞台の背景が次々と変わり、最後は御殿の大広間になる仕掛け。舞台返し、襖からくりともいう。



衣裳山：豪華な衣裳を何本もの竿に吊して、三味線に合わせて上下させて披露する。  
かしらの大型化：明治中期、人形師天狗屋久吉(徳島)が淡路座の求めで大きなかしらを作った。

一般に立役(男の主役)の場合、  
文楽で4寸、阿波淡路では6寸以上(1寸約3cm)

## 10 淡路人形浄瑠璃の伝承

### (1) 淡路人形保存運動

昭和10年 淡路人形芸術復興協会発足

昭和33年 淡路源之丞座ソ連公演

昭和39年 淡路人形座発足

昭和51年 国の重要無形民俗文化財指定

昭和52年 淡路の1市10町で(財)淡路人形協会発足

昭和60年 淡路人形浄瑠璃館(大鳴門橋記念館)開館

平成 2年 市村六之丞座の道具一式を三原町が買い取り、淡路人形浄瑠璃資料館開館

平成 3年 第1回全国人形芝居サミット&フェスティバル開催(以後10年間淡路で開催)

平成 9年 淡路人形芝居サポートクラブ発足

平成24年8月8日 新淡路人形座が福良港にオープン

### (2) 淡路人形座

○定時公演(1日5公演)のほか、出張公演、海外公演

○座員19名(昭和60年に準公務員化が実現したが、南あわじ市発足に際し民間へ)

○海外公演 20回(延べ31カ国2地域)

○技芸の伝承、淡路独特の外題の伝承・復活への取り組み

後継者団体(小中学校・高校・子供会)の指導

各地の人形芝居保存団体の活動に協力

○吉田伝次郎座を継承し、昭和35年に発足(三原町公民館で公演)。

昭和43年、福良港阿淡汽船待合所の2階に移転。

昭和60年、大鳴門橋記念館内の淡路人形浄瑠璃館に移転。

平成24年、福良港の淡路人形座に移転。

### (3) 後継者団体等の活動

- ・南あわじ市賀集福井子供会(昭 46～)
- ・市小学校郷土文化部(昭 46～)
- ・南淡中学校郷土芸能部(昭 58～)
- ・三原中学校郷土部(昭 58～)
- ・淡路三原高校郷土部(昭 27～)
- ・淡路人形浄瑠璃青年研究会(昭 46～)
- ・淡路人形芸舞組(平 20～)

## 11 二人の人間国宝



### 鶴澤友路

大正2年(1913)12月9日生

(現・南あわじ市福良)

六世鶴澤友次郎門下

平成10年 人間国宝

(重要無形文化財「義太夫節三味線」  
保持者)



### 竹本駒之助

昭和10年(1935)9月25日生

(現・南あわじ市市)

四世竹本越路大夫門下

平成11年 人間国宝

(重要無形文化財「義太夫節浄瑠璃」  
保持者)